

東西方言対立語からみた『書言字考節用集』の性格

佐藤 貴 裕

要 旨

本稿は、『書言字考節用集』の位置付けを、東西方言対立語の調査によって試みたものである。

『書言字考』は、東日本に固有の語形の初出として辞書などに引用されることがある。が、本書の成立・刊行は、近世前期に属しているから、東国の語形を収載する可能性はほとんどないはずである。そこで、この二つのことを、次のように解釈しうるかどうかを検討する必要がある。

A 『書言字考』の東国の語形は、前代までの資料から引用したものであって、方言形を収載したのではない。
B 東国語形の収載は『書言字考』だけでなく他の近世節用集にもみられる。

そこで、東西方言対立語(東国の語形は上方出自でないもの)の収載状況を、他の節用集も含めて調査した。その結果、次のようなことが明らかになった。

a 『書言字考』は、前代までの資料からの引用でない、その意味で純粹の東国の語形を収載している。
b aのような現象は他の節用集では見られなかった。ただし、一八二〇年以降の節用集はこの限りではない。

に焦点を絞って考察していきたい。

『日本国語大辞典』(小学館)などが、現代の東京や東日本に固有の語形の早い例として『書言字考』を挙げることがしばしば見られる(トモロコシ玉蜀黍・コケ鱗など)。このことから『書言字考』が東国の語形を収載していることが予想される。しかし、『書言字考』の成立・刊行は元禄・享保であって、当時の上方語の勢力を考慮すると江戸語形の収載は極めて例外的なことと思われる。さらに、辞書における規範性の追求・強い書承性を考えると、江戸語形の収載は不可能であると思われるのである。

このように対立する二つの事柄を矛盾なく説明するには次のように考えるほかなかろう。

①『書言字考』の江戸語形は前代までの資料から引用した古い上方(京都)語であり、江戸で使用されていた語形は上方から地理的に伝播してきたものであって、外見上江戸語形を収載したように見えるに過ぎない。

②江戸語形の収載は、『書言字考』に限らず、近世節用集一般に見られる現象である。

この二つのどちらかによって説明できないときに、例外を例外として認める説明、

③『書言字考』では、何らかの要因あるいは必然があつて江戸語形を収載している。

という可能性を検討することになろう。したがって、本稿では①②を検討し、③が認められるか否かを吟味していくことにする。

したがって、『書言字考』は、近世前期の成立・刊行でありながら東国の語形を収載する特異な節用集であると考えられた。このことの要因として、①編者・横島昭武が江戸在住の人であること、②「言」の言語にも漢字が不可欠とする思想を持っていたこと、③「街談衢話」をも編集時の資料としたこと、が確認された。また、④編集当時の江戸語の動態や、⑤東国の語形の収載の仕方が、上方語形に比べて制約のあることなども強く関係しているものと考えられた。

一 はじめに

本稿は、『和漢音釈書言字考節用集』(横島昭武編・享保二二・二七・年刊。以下『書言字考』と略す)の特異性の一つとして江戸(東国)語形の収載を確認し、その要因について考察するものである。

『書言字考』は近世の節用集中もつとも大規模なものの一つであり、種々の研究にも利用されてきている。最近では『書言字考』自体の研究も数多く発表され、書誌・語彙の性格等が明らかにされつつある。が、『書言字考』の性格は多面的であるらしく、全貌が明らかにされるまでには至っていないようである。そこで、本稿では、『書言字考』収載語の性格の一端を明らかにするために、その方言性

二 方法と資料

まず、仮説①を検討するために、『書言字考』における東西対立語の収載状況を調査する。ただし、その江戸語形は上方出自でないものとする。それは、非上方出自の江戸語形の収載が確認されれば、仮説①は説明として有効ではないと判断されるからである。

東西対立語は、主として近世の方言書・随筆から、東西での対立が明記されている語を選んだ。さらに、収集資料の編著者の誤解や誤記によるものを除くため次のような採用基準を設け、a~d、あるいは、a~eまでを満たした語を最終的な調査語とした。

- a 収集資料の二つ以上に記載されるもの。
- b その上方語形が江戸で使用されないもの(江戸に伝播しなかったと思われるもの。前田勇編『江戸語大辞典』による)。
- c また東国語形が上方で使用されないもの(同編『近世上方語辞典』による)。
- d 東国語形が上方出自でないこと(『日本国語大辞典』による)。
- e ただし、上方出自であっても、近世前期では『書言字考』にしか用例のないものは採用する。

右の基準に適合した調査語は一二三語となった(他に『日本言語地図』からも調査語を取り、分布の上からa~cがある程度察せられるので、dかeに適合するものを採用した)。

仮説①の認否に関わらず、仮説②は『書言字考』の性格を考える上で検討する価値がある。そこで、東西対立語の収載状況を比較するため、筆者が身近に調査しうる近世節用集から一二本を選んだ。その際、前田富祺「語彙研究資料としての節用集」を参考に

し、収載語数の多いこと(『書言字考』と同等以上であること)、任意の二本間で収載語の類似が強く目立たないことなどに注意した。

- ①節用集大全 恵空編 延宝八(一六八〇)年
- ②合類節用集 若耶三胤子編 延宝八年
- ③真草 廣益二行節用集 編者未詳 貞享三(一六八六)年
- ④古文頭書大益節用集綱目 苗村丈伯編 元禄三(一六九〇)年版
- ⑤大成正字通 編者未詳 享和二(一八〇二)年版
- ⑥大全早引節用集 編者未詳 文化一四(一八一七)年版
- ⑦多編絵引節用集 秋里籬島編 文政七(一八二四)年版
- ⑧蘭例節用集 広川獭編 文化二二(一八二五)年
- ⑨増広倭節用集悉改大全 音訓 俣野通尚編 文政九(一八二六)年版(三冊本)
- ⑩大成無双節用集 鶴峰戊申編 嘉永二(一八四九)年
- ⑪早万代節用集 宮田彦弼編 嘉永三(一八五〇)年(二冊本)
- ⑫江戸大節用海内蔵 高井蘭山編・中村経年補 文久三(一八六三)年

調査の際、原則として右訓のみを収載語として認めたが、左訓が著しく少ないためにかえって目立つ本では左訓をも採った。これは、少なからず検索の便ともなりうると思えたためである。したがって、左訓の頭字が右訓のそれと一致するときだけ採用した。また、一方の方言語形の注となっている他方の語形をも採った。が、双方とも二、三語に過ぎない。

三 『書言字考』収載の江戸語形

調査の結果、『書言字考』に収載された江戸語形は、一二三の調査

もある。それは、「鱧」字にメ、ザツコ(静嘉堂文庫本)・メ、シャコ(元龜二年本)という訓をも付しているからである。これらの語形を『物類称呼』は目高の関西方言としており、用字が意義の仲立ちをしているとすれば、『運歩集』のキスは目高である可能性すらあるのである。

さらに、『運歩集』は、二段動詞の一段化や形容詞終止形をシシ(イ)語尾とするなど、当時の辞書としては規範的でない面が目立つという報告もある。これらのことから、『運歩集』のキスの例によって、上方でキス鱧が使用されたとするのは危険であり、『書言字考』のキスの出自も上方語以外のものに求めたほうがよさそうだと考えられるのである。

(3)ツムジ旋毛 和名類聚抄・類聚名義抄・色葉字類抄

ツムジは院政・鎌倉初期までの資料に見られ、これ以降はツジばかりが見られるようになる。よって、『書言字考』が先行資料から引用したとすれば、鎌倉初期までの資料からと考えられる。その中には、高梨信博氏は出典注の出現頻度から『書言字考』は「国書では『和名類聚抄』・日本書紀・万葉集」の三書の引用がもっとも多い」とされるから、『和名抄』に依った可能性が最も高そうである。確かに、ほとんどの先行節用集が旋毛を支体門に収めるのに対し、『書言字考』では気形門に収めていて、『和名抄』の牛馬類にならったようにみられる。また用字の廻と同も両者通用されることがあり、大きな差ではない。

廻毛 爾雅注云廻毛一云旋毛和名都無之 (元和本和名抄一一 一三

ツジ 旋毛 同毛 (書言字考五 三二才)

語のうち一二語であった(表一を参照^{注7})。このうち、先のaとdに適合したものも九語もあるので、仮説①は成り立たないようである。さらに、aとeに適合した三語について前代までの資料から引用した可能性を検討してみよう。

(1)コケラ鱗 天正狂言本(『日本国語大辞典』の挙例。以下同じ)

『天正狂言本』では「ちる花はさながらたいのこけらかな」となっている(連歌の十徳。表章『日本古典全書 狂言集』下)。が、『天正狂言本』は、表章氏が東北在住の狂言師の手になったと推定されているので、上方で書写されたもので確認すると「ちる花はたいのうろこにさもにたり」(大蔵虎明本。池田廣司・北原保雄『大蔵狂言集の研究本文篇』上)と上方語形を用いており、天正本とは対立しているのである。それに、天正本は東国語的特徴が目立つものであるから、このコケラの例をもって上方で使用されたと考えるのは穏当ではない。『書言字考』のコケラも上方語としてではなく江戸(東国)語形として収載されたと考えられるのである。

(2)キス鱧 運歩色葉集 天文一七(一五四八)年成立

『運歩集』静嘉堂文庫本・元龜二年本ともに「鱧」字にキスを付しており(「魚之名」)、『運歩集』の影響が推定される弘治二年節用集や永禄二年本・堯空本・経亮本・枳園本・天正一十七年本などの印度本節用集も同様である。が、『書言字考』は「鱧残魚」を用い『節用集大全』『合類節用集』も同熟字に上方語形キスゴを付しているの、用字の上からは、『運歩集』や印度本節用集などから引用した痕跡は認められない。

また、『運歩集』のキス自体、鱧を意味するのかどうか疑わしい面

このように語形の一致だけではなく他の面からも影響の深さを傍証する事象が見られるので、『和名抄』から引用した可能性はかなり高そうである。が、これらの事象が先行節用集の影響でないことを確認しなければ、性急に認めることは避けたい。特に『合類節用集』などは『書言字考』と深い関わりがあるようだから、この検討は是非とも必要である。

まず、先行節用集での旋毛の注記に着目し、『書言字考』で気形門に収載されるようになった契機がないかを見ていくことにする。

A「馬(ノ)ノ」とするもの。

広本・易林本(原刻・平井・小山の各版)・草書本・真草二行節用集(寛文二年版など)・広益二行節用集

B「人馬」とするもの。

弘治二年本(天正一十七年本も)

Cこの種の注記のないもの。

伊京集・節用集大全・合類節用集・頭書大益節用集綱目

ABのような注の存在は、改編意図の旺盛な編者によれば旋毛を気形門にも収める本が出現することを暗示している。そして現に、大幅な改編が認められる本の中には、気形門にも収めるものがあるのである。たとえば、ここに引くのはふさわしくないかもしれないが、『塵芥』では「旋毛」を気形門にも収める。また、いわゆる合類体最初の節用集『合類節用集』では「旋毛」を諸獣部にも収めるのである。よって、門の異同については先行節用集の影響を無視できないことがわかる。そこで、別の点からも先行節用集との関わりを見ていく。まず、「回」と「廻」との選択状況はつぎのようである。

廻(「回和名抄」) 塵芥・節用集大全・広益二行節用集

回(『書言字考』) 弘治二年本(天正一十七年本も)・合類節用集(注記)

熟字の掲出順は次のよう。^{注20}

廻(回)毛・旋毛(『和名抄』) なし

旋毛・廻(回)毛(『書言字考』) 弘治二年本(天正一十七年本も)・

節用集大全・合類節用集(旋毛^{又云}廻毛)・広益二行節用集(ただし、廻毛)は増益の部分

また、一熟字のみ掲載のものは次のよう。

廻(回)毛(『和名抄』) なし

旋毛(『書言字考』) 広本(ただし「旋」・伊京集(同)・易林本

(原刻・平井・小山の各版)・草書本・真草二行節用集(寛文二年版など)・頭書大益節用集綱目

これらの諸特徴が先行節用集と『書言字考』とで一致し、その中でも特に『合類節用集』が多く、一致しており、関係の深さが窺われる。よって旋毛に関する限り、『和名抄』の影響とみるには、少なくとも先行節用集との関わりを無視できないと考えられる。

また、『和名抄』からの引用を示す出典注がないことにも注意したい。もちろん、出典注がなくとも引用した可能性はある。が、気形門は他の門よりも出典注の施注率が高い門であるから、注目してよいであろう。

さらに、『書言字考』のツムジは左傍訓であることに注意したい。節用集に限らず左傍訓よりも右傍訓のほうが優位に立つのが普通である。『書言字考』のツムジが『和名抄』の引用であったとしても、引用者(编者)は何かの点で上方語形ツムジよりも劣るものとして、ツムジが規範的な語形ではない、あるいは、上方語形ではないと

ものとなしないうちがあることが知られる。おおむね、これらは、一八二〇年以前(仮に「前半期」と呼ぶ)の本が江戸語形を収載せず、それ以降(同じく「後半期」の本が江戸語形を収載している。よって、前半期の刊行ながら江戸語形を二語も収載し、その数のうえでも後半期の本に劣らない『書言字考』は、かなり特異な節用集であるとしてよいだろう。

次にやや詳しく表を見ていきたい。調査語の収載のされ方として、上方語形単独収載(一)、江戸語形単独収載(二)、両語形収載(三)がある。このうち、上方語形単独収載は、どの本においても他を圧倒しており、近世の節用集(の収載語)は基本的に上方語に依っているとしてよい。これは、先行節用集からの書承によるのであろう。

また、近世における東西方言の対立という視点からは、節用集においては近世全期を通じて上方語が他の言語(方言)より優位なものとして認められていたとも見られよう。

また、両語形収載は、数の上で江戸語形単独収載よりも多く、節用集自体上方語形が圧倒的であることから、最も自然な江戸語形の収載形式であると思われる。また江戸語形を収載するとはいつても、上方語形に取って代わっているわけではないし、恐らくは先行節用集の上方語形を継承しながら江戸語形を増補したのであろうから、依然として上方語形が中心となっているものとも見られる。^{注21}

上方語形の優位性がこのように目立つ中では、江戸語形単独収載は異端であり、数の上でも著しく少ないので例外的な収載形式であると思われる。その中で『江戸大節用』には七例もあって異質である。刊行が一番遅く、それだけ江戸語の全国的伝播を反映しているのかもしれない。が、書名に「江戸」を冠していることから推測さ

認めていたとも考えられるのである。

以上から、『書言字考』のツムジを『和名抄』からの引用とするには、先行節用集の影響を十分に考慮すべきこと、仮に引用であったとしても規範的な語形(上方語形)として認められていたとは考えにくいこと、などが明らかになった。よって、ツムジの場合も、前代までの資料からそのまま引用したとするのは妥当ではないように思われるのである。

以上、コケラ・キス・ツムジの三語について前代までの資料から引用した可能性を検討した。その結果、上方で使用されたことすら証明したいものや引用の可能性が少ないものばかりであった。また、すでに調査語の選択段階で他の九語はこの点での問題はなかった。よって、『書言字考』は、前代までの資料からの引用ではない、その意味で純粋の江戸語形を収載していることが明らかになった。

四 近世節用集中の『書言字考』

ここでは、まず、江戸語形の収載が『書言字考』だけの現象であるのかを検討し、同時に、近世節用集中の『書言字考』の位置付けをも考察する。

そこで、『書言字考』で調査した東西対立語の収載状況を他の近世節用集でも調査した。その結果を、江戸語形が、『書言字考』に収載される調査語(表二)、一八二〇年以降の本で収載される調査語(表三)、どの本にも収載されない調査語(表三)に三分して示した(計五九語。なお、上方・江戸両語形のどちらも収載されない調査語は示さない)。

まず、大方の傾向として近世の節用集には、江戸語形を収載する

れるように江戸語形を多く収載することで他の本にない特色を得ようとしているらしい。江戸語の台頭を示す一例としては見逃せない本ではあろうが、節用集の中では特異なものであろう。

以上のことから一二本を整理し、『書言字考』の位置付けを検討していく。二本はいずれも上方語形優勢であるから大きく一つにまとめられる。大別すれば、一八二〇年ころを境に前半期八本・後半期四本となる。後半期の本は、江戸語形の収載状況によりさらに細分されよう。『大成無双』が江戸語形の収載が少なく、『江戸大節用』が江戸語形の単独収載が目立ち、それぞれ特徴的である。結局、『大成無双』と『倭節用集・早引万代』と『江戸大節用』とに三分される。

この中で『書言字考』を位置付けるならば、後半期の節用集と比較検討するのがふさわしい。両語形収載が八例あることから『倭節用集・早引万代』のグループに最も近い。が、江戸語形の単独収載が四例あり例外とするにはやや多いものの、『江戸大節用』の七例には及ばないから独自のグループを成すとしてよい。仮に図式的に示せば次のようになる。

書言字考
倭節用集・早引万代
大成無双
江戸大節用

(他本との隔たりは「一」の順に弱くなる)

以上のように『書言字考』は、近世前期の節用集としては特異な性格を持っており、それ以降の本に近いことが明らかとなった。

ところで、一八二〇年以降の本が江戸語形を収載するのは江戸語

表三									
うる(こめ)	うるち	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
おこす	よこす	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
おこす	よこす	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
かんこくさい	きなくさい	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
かんこくさい	きなくさい	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
かんこくさい	きなくさい	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
かんこくさい	きなくさい	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
かんこくさい	きなくさい	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
かんこくさい	きなくさい	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
かんこくさい	きなくさい	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食

表二									
いせえび	かまくらえび	物浪	L	草	支	人	支	器	食
いりつけ	にざかな	物浪	L	草	支	人	支	器	食
うき(ん)た	めだか	物浪	L	草	支	人	支	器	食
お	しつぽ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
かわつば	かっぱ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
さやまめ	えだまめ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
さいら	さんま	物浪	L	草	支	人	支	器	食
しるあめ	みずあめ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
ぞめき	そりだ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
ちらし	つむじかぜ	物浪	L	草	支	人	支	器	食

表一									
いかのぼり	たこ	物浪守皇合	L	草	支	人	支	器	食
うろこ	こけ(ら)	物浪皇	L	草	支	人	支	器	食
おうこ	てんびんぼう	物浪皇	L	草	支	人	支	器	食
きすご	きす	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
き(く)びす	かかと	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
げばな	れんげそう	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
つじ・きりぎり	つむじ	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
でんでんむし	まいまいつぶり	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
なんばんきび	とうもろこし	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
はったい	むぎこがし	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
めいば	ものもらい	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食
ゆ(う)	ゆず	物浪皇合	L	草	支	人	支	器	食

表二									
いせえび	かまくらえび	物浪	L	草	支	人	支	器	食
いりつけ	にざかな	物浪	L	草	支	人	支	器	食
うき(ん)た	めだか	物浪	L	草	支	人	支	器	食
お	しつぽ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
かわつば	かっぱ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
さやまめ	えだまめ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
さいら	さんま	物浪	L	草	支	人	支	器	食
しるあめ	みずあめ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
ぞめき	そりだ	物浪	L	草	支	人	支	器	食
ちらし	つむじかぜ	物浪	L	草	支	人	支	器	食

上方語形	江戸語形	収集資料	門
書言字考	1717		
節用集大全	1680		
合類節用集	1680		
広益二行	1686		
節用集綱目	1690		
大成正字通	1782		
大全早引	1787		
絵引節用集	1796		
蘭例節用集	1815		
倭節用集	1826		
大成無双	1849		
早引万代	1850		
江戸大節用	1863		

(凡例)

- ・ 一は上方語形の収載を示す。
- ・ 一は江戸語形の収載を示す。
- ・ 十は両語形収載を示す。
- ・ 空白はいずれの語形も収載されないことを示す。

・ 節用集の配列は、山田忠雄『開節用集分類目録』などにより、初版本の年次に従った。

・ 「収集資料」の略称

物 物類称呼 越谷吾山編 安永四(一七七五)年刊 京
浪 浪花間書 編者未詳 文政二(一八一九)頃編(日
本古典全集本)。

守 守貞漫稿 喜田川守貞著 天保八(一八三七)嘉
永六(一八五三)年著(名著刊行会の復刻本)。

皇 皇都午睡 西沢一鳳著 嘉永三(一八五〇)年成
群書類本)。

合 東西言葉合わせ 窮食庵野立編 明治一九(一八八
六)年刊(国立国語研究所蔵本)。

浮 浮世風呂 式亭三馬著 文化五(一八〇八)同七
(一八一〇)年刊(日本古典文学大系本)。

鄙 鄙通辞 棹歌亭真檀著 文化八(一八一二)年刊(東
北大学狩野文庫蔵本)。

街 街通辞 平亭銀鷄著 天保六(一八三五)年刊(同
蔵本)。

宝 たからはこ 編者未詳 天保二(一八四二)年刊
(国立国語研究所蔵本)。

江 江戸語大辞典 前田勇編 昭和五四(一九七八)年
刊 講談社。

L 日本言語地図 国立国語研究所編 昭和四一(一九
六六)同四九(一九七四)年刊 大蔵省印刷局。

*「海蝦」の参照注(出字)により「海蝦」をひくと「土俗
或云伊勢蝦。或云鎌倉蝦」とあるが、本文3ページ上段の「原
則」を超えるので表示しなかった。なお、この例も含めれば、
「書言字考」の上方語形収載(一)は24、上方江戸両語形収載
(十)は9となる。

計	①	十	一	支	乾	人	言	言	衣	支
37	4	8	25	—	—	—	—	—	—	—
24	—	—	23	—	—	—	—	—	—	—
31	—	—	30	—	—	—	—	—	—	—
26	—	—	25	—	—	—	—	—	—	—
28	—	—	27	—	—	—	—	—	—	—
44	—	2	41	—	—	—	—	—	—	—
33	—	—	32	—	—	—	—	—	—	—
35	—	—	34	—	—	—	—	—	—	—
41	—	—	41	—	—	—	—	—	—	—
40	1	13	27	—	—	—	—	—	—	—
34	1	2	32	—	—	—	—	—	—	—
50	1	12	38	—	—	—	—	—	—	—
47	7	18	23	—	—	—	—	—	—	—

の台頭を反映するものと解釈されようが、享保二（一七一七）年刊行の『書言字考』ではこの解釈はあてはまらない。そこで次に、『書言字考』の江戸語形収載の要因を探ることにしたい。

五 『書言字考』における江戸語形収載の要因

まず、編者の側に属することから検討していく。『書言字考』の編者・横島昭武は、「標題」末に「東武城隅賤士」、第一冊本文冒頭その他に「東武駒谷散人」とあるから、江戸在住であったことが知られ、彼にとっては江戸語が身近な言語であったと推測される。これに加えて、昭武は「言」の言語（音声言語）にも字が不可欠だとする思想を持っていたことに注意したい。

嘗聞文章者経國之大業不朽之盛事。席巻字内、囊括品物、其功魁偉其德廣遠。嗟呼於書於言日夜昏明朝野尊卑不可莫文不可莫字。（標題）第一冊 一オ

この思想を『書言字考』に反映させるのならば、「言」としてのみ

それまででない繁栄を迎えており、江戸語も重要な時期にあつたらしい。例えば、小松寿雄氏は「貞享頃『江戸言葉』という言い方が出て来ることや江戸生まれの増加などから考えて、元禄頃一部に江戸共通語の前身が形成されかけていたともみられる」と推定された。そして最近、この推定を支持するような資料が『江戸風俗図巻』（元禄一六年頃の成立）として松村明氏によって紹介された。この図巻では、一人の話者の発話の中に上方語的要素と東国語的要素とが認められ、のちの江戸語に近い構成となつてゐる。すなわち、元禄の江戸では、方言雑居の状態から洗練された言語体系（上方語と東国語との融和混濁）への移行が見られるのである。こうした新しい江戸の言語は、勢力も全国的ではなかったであろうが、横島昭武は江戸に在住していたため、新しい都会の新しい言葉を敏感に察知しうる状況にあり、その語彙を『書言字考』に収載したという推測も可能であろう。

しかし、当時の国語における上方語の重要性・規範性を考えるならば、いかに特殊な思想・事情が昭武にあったにせよ、以上のような理由だけで江戸語形を収載したとは考えにくい。それに、昭武は膳所藩の右筆だったこともあり、学識も高かったと思われる。己の思想を反映させるとは言っても、当時一方言に過ぎなかった江戸語を辞書に収載してしまうのは軽率であらう。この点についてはさらに検討を加える必要がある。

そこで、『書言字考』での江戸語形の扱い方を見ていただきたい。

一二語の江戸語形は、収載のされ方によって次のように分類される。

- (1) 参照注（参照すべき語形の所属部を示すもの）があるもの 四語
- (2) 左傍訓として収載されたもの 二語

存在する方言や俗語からも漢字を求めうるような内容となろう。現に、別の箇所では「街談衢話」からも収載語を取ったとし、それにちなんで「書言字考」と名付けたようにも思われる。

一旦發憤、走記誦、甘糟粕、彼此之交事物之觸。新舊舊籍街談衢話拾綴、綜部類參考、遂終一帙之功。名曰『書言字考』。（同 二オ）

このような発言は、近世後期の節用集ではよく見られるが、前期のものでは管見の限りでは他には見当たらない。それは、規範性を求める使用者にとってはかえって不快感を抱かせるからであろうか。ならば、この一節は正に蛇足であるが、それだけに「言」の言語への並々でない関心が窺われ、単なる誇大広告ではない編者の本音と見られよう。よって、「言」の言語のうち、昭武にとって身近な江戸語の語彙を『書言字考』に収載した可能性は十分にあると思われるのである。

また、当時の江戸語の側からも検討しておこう。『書言字考』が成立・刊行された元禄・享保ごろの江戸は、先学が指摘するように、

- (3) 俗注として収載されたもの
- (4) その他

まず、(1)の例を次に掲げる（◇内は、江戸語形・上方語形・参照語形を示す）。

- ① 江戸 蝸牛カマツリ出加。土牛カマツリ全上。土牛兒カマツリ上。附螺カマツリ（同）土牛兒（同二八ウ）
- ② 江戸 鱗カマツリ出伊。鱗字カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ③ 江戸 鱗カマツリ出伊。鱗字カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ④ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑤ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑥ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑦ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑧ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑨ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑩ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑪ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑫ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑬ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑭ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑮ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑯ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑰ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑱ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑲ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ⑳ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉑ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉒ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉓ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉔ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉕ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉖ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉗ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉘ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉙ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉚ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉛ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉜ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉝ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉞ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㉟ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊱ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊲ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊳ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊴ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊵ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊶ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊷ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊸ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊹ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊺ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊻ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊼ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊽ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊾ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）
- ㊿ 江戸 紙カマツリ出伊。紙カマツリ（左訓・コケ）（同三九オ）

①と②（参一）を除けば、参照語形は上方語形であるから、江戸語形を引いても上方語形を検索できる。すなわち、編者は、上方語形にも十分に意を用いており、江戸語形を軽率に収載したとは言えないのである。

また、参照注は、参照すべき語形の対の双方に付されるのが原則のようである。ここでも確かに、東西対立語の対ではない①や②（参

注14 なお、辛川十歩・柴田武『メダカ乃方言』（未央社 昭55）によれば、

キスが千葉県木更津市・長野県大町市・同南安曇郡・三重県安芸郡にもあるという。他にギス(愛知県海部郡七宝町)・キスッコ(千葉県君津郡・長野県南安曇郡)・ギスッコ(長野県小県郡)もある。キス鱧は目高もありえなくはない。

注15 森昇「『静嘉堂文庫』運歩色葉集の語法」(文学語学27 昭38)。他に、迫野虔徳「『元龜二年本』運歩色葉集について」(国語国文42-7 昭48・7)など。

注16 小林隆氏も同様のお考えである(注3の小林論文参照)。ツムジの例、『東南院文書』(奴婢見來帳)「東大寺奴婢籍帳」・本文に掲出した古辞書など。ツジの例、『名語記四』常徳院殿様御馬召初めらるゝ事・「狂言六義」巻之一・「本朝食鑑」一一・「諸艶大鑑」巻二など。他に古辞書など。

注17 注2、高梨論文④65ページ。

注18 注2、湯浅論文237ページ。

注19 上田万年・橋本進吉「古本節用集の研究」(東京帝国大学文科大学紀要2 大5) 118ページ。

注20 ただし、『和名抄』は『爾雅注』からの引用なので、掲出順を考える際には割り引く必要があるかもしれない。が、廻毛を頭出(あるいは見出し化)するので次項とも関わりのあるものとして取り上げておく。

注21 注2、高梨論文④63ページ。

注22 各地の方言語形を注で示す場合などにも上方語形の優位性が見られる。「玉蜀黍」(東国にて「もろこし」にてたう)「倭節用集一六三才」紙端これは京畿および「西国北国」(きびと云)「倭節用集一六三才」紙端中国の称也關東「タコ」といふ(「早引万代二才」)。この種の注は上方語形だけに見られ、江戸語形にはない。これは、他の方言語形を示す際の基準となる語形が上方語形であることを示しているよう。

注23 東北大学附属図書館・同狩野文庫蔵本などの範囲。

・『中世古辞書』研究並びに索引「元龜二年 運歩色葉集」(天正一十七年本運歩色葉集)『諸国 物類称呼 本文・釈文・索引』(清原重賢自筆伊 成倭名類聚抄)『略波分類体辞書』塵芥「諸

*紙数の都合で「資料」は書名だけ示した。

〔付記〕本稿は、昭和61年5月25日国語学会春季大会研究発表会の発表資料に加筆したものである。会場その他で御教示いただいた先生方に厚く御礼申し上げます。また成稿まで種々御指導いただいた加藤正信先生・佐藤武義先生・小松寿雄先生に深謝申し上げます。

——東北大学大学院生——

(昭和六十一年九月十日 受理)

(昭和六十一年十月二十九日 改稿受理)

注24 吉田澄夫『近世語と近世文学』(東洋館出版社 昭25)、松村明「江戸語東京語の研究」(東京堂 昭32)、金田弘「江戸語と関東方言」(国語と国文学36・10 昭34・10)、杉本つとむ『近代日本語の成立』(桜楓社 昭35初版 昭36改訂新版)、同『日本語再発見』(社会思想社 昭45)、同『近代日本語』(紀伊国屋書店 昭56)など。

注25 「江戸語の形成」(松村明教授 国語学と国語史 明治書院 昭52) 518ページ。

注26 『日本語の世界2 日本語の展開』中央公論社 昭61) 41・46ページ。たとえば、「御いんきよさまちと御やすみ遊はせ 道はおたつしやな事さ」(傍線上方的なもの、傍点東国的なもの。前掲書42ページ)など。

注27 「書言研究索引」(8・9ページ)。

注28 「書言研究索引」25ページ上段など。筆者の予備的な調査でも、門によって異なるようだが、相互参照の対六・八・偏在の対四・二程度であった。

参考文献・資料

- 東条操 「メダカとメメザコ」(国語学1 昭23)
山田忠雄 「節用集天正十八年本類の研究」(東洋文庫 昭49)
同 「『開館用集分目録』(大東急記念文庫文化講座ノタメ 昭36)
・「節用集」(日本古典全集)「乾本節用集」『玉里文庫本節用集』「正宗文庫本節用集」『古本節用集六研究並びに総合索引』「印文本節用集研究並びに総合索引」『印度本節用集四種研究並びに総合索引』「印文本節用集和漢通用集他三種研究並びに総合索引」『天正十八年本節用集(東洋文庫叢刊)』「易林本節用集」『経亮本節用集』「天理善本叢書22節用集二種」『同59増刊下学集・節用集天正十七年本』「早大本節用集 本文・研究・索引」『大谷大学本節用集研究並びに総合索引』